

英語テストのストラテジー (3)

高橋 守

はじめに

2002年度に英語テストのストラテジー(方略)について書き始めてから、今年度で3回目となる。本稿では、これまで扱ったことのなかったライティングテストの方略を取り上げる。ライティングテストとは、与えられた課題に対して英語で答案を作成するテストである。

米国におけるアカデミックライティングでは、ある程度長い時間をかけて学生に作文をさせるのに対して、TOEFLなどにおけるライティングテストは、極めて短時間の内に受験生に結果を出させるという違いがある。しかし評価基準に関しては、ライティングテストとアカデミックライティングは、ほとんど同じである。従って、米国大学のアカデミックライティングの指導方法を下敷にすれば、ライティングテスト対策も可能である。英語で作文をする際の手順を明らかにすることにより、学生が英語のエッセーテストを受けるのに必要な方略を見出し、学習指導に役立てることが本稿の狙いである。

1. 課題の内容をはっきりと理解すること

英語で作文をする時は、まず課題を理解することが大切である。課題には普通、自分の経験を表現するタイプ、ある事柄について説明をするタイプ、ある立場から相手を説得するタイプという3種類の異なる課題がある。そのため最初に自分は何についてどのような文章を書くべきかを決めなくてはならない。

自分の経験に基づいて想像したことや、主観的意見を述べるように要求されている場合には、課題が示す状況に自分を置いて考え、そこから様々な事柄を想像する。自分が経験したことや自分の理想とすることを思い浮かべると、アイデアが浮かびやすい。

客観的に説明的文章を書くことを要求されている場合は、比較・対照、例示、分類、定義などのパターンの中で、どれを使って論を展開したらよいか考えるようにする。

説得的な文章を書く場合は、一定の主張が真実であることを知的に認めさせなければならないのだが、主観的な主張をするのではなく、説明的な文章を書く時と同様に客観的な論理の展開の方法を考えるようにする。

2. プライティングについて

英語で作文をする時に、何も浮かんでこない状況から脱するには、与えられた課題を良く読み、何を答えたら良いかを考えなければならない。そしてプライティング(prewriting)の方略を使う必要がある。プライティングには、フリーライティング(freewriting)、クラスタリング(clustering)(クラスタリングはアウトラインを作る時にも用いられる)、クエスチョニング(questioning)の3種類の方略がある。これらのプライティングに共通する注意点は、この段階では自分が生み出すアイデアに対して批判的にならないことである。またこれらの方略は、原稿を書く前の段階に限らず、最後まで使うことのできるものである。アイデアに詰まった時には、これらのテクニックを使用することによって、言葉を紡ぎだすことが出来る。

フリーライティングは、10分間程度の時間を決めて頭に浮かんだことを全てノートに書くやり方である。

文法と綴り字の正確さにこだわる必要が全くない。何も頭に浮かんでこない時には、「何も浮かばない」と書けば良い。

クラスタリングは、紙の中心にテーマとなる言葉を書き、その言葉を丸で囲んで、その言葉を中心としたクモの巣状のものを作成することによってアイデアを書き出す方法である。中心となる言葉から周辺に向かって線を引き、その線の先に思いつくままに言葉を書いて行く。クラスタリングの利点は、自分の書こうとしているトピックの順番を、考えなくても良いという点にある。

クエスチョニングは、自分自身に質問をして、その質問に答える方略である。質問の種類は与えられた課題によって異なる。自分の経験を表現する文章を書く課題に対しては、自分の経験から何が言えるか、どんなことに読者が興味を抱くか、などの質問に答える。説明する文章を書く課題に対しては、読者が課題に対してどのような質問をするかとか、課題を説明するのに必要な要素は何かを考える。説得的な文章を書く課題に対しては、課題からどのような論争が起るか考えたり、自分の立場に対して読者からどのような反論があるか、などを考える。

3. 良いトピックセンテンスの書き方について

トピックセンテンス(topic sentence)は、別名セーシスセンテンス(thesis sentence)とも呼ばれている。これは通例パラグラフの最初に置かれて、そのパラグラフの内容を要約する文である。良いトピックセンテンスを書くには、どうすべきだろうか。

Sebranek, Kemper, and Meyer (2001)によれば、トピックセンテンスを書く公式は「特定のテーマ」プラス「特定の条件、感情、立場」イコール「効果的なトピックセンテンス」である。例えば、

- (1) Young children exposed to low levels of lead (これが「特定のテーマ」)
may face health problems later in life. (これが「特定の条件」)
- (2) General George McClellan's overcautious tactics (これが「特定のテーマ」)
prolonged the war. (これが「特定の感情」)
- (3) Barbed hooks (これが「特定のテーマ」)
should be banned from fishing. (これが「特定の立場」)

ここで述べられているのは、良いトピックセンテンスというものが、単なる明白な事実を書くというのではなく、あるテーマの持つ特殊な条件や特色を強調表示するということである。

伊藤 (2002) によれば、良いトピックセンテンスを書くためには次の点に注意しなければならない。

- a. トピックセンテンスは、パラグラフの中身をまとめたものでなければならない。
- b. トピックセンテンスは、書き手の考えや意見も含んでいなければならない。
- c. トピックセンテンスは、そのパラグラフが何についての話なのかを明確にわかるようであるべきでなければならない。従って、広すぎるトピックは、避けなければならない。
- d. トピックセンテンスは、これから何々について書きますという文ではいけない。例えば、In this paragraph, I will address the economic theory presented by him.というのは不適當である。
- e. 一つのトピックセンテンスにいろいろな話を詰め込んではいけない。例えば、Dogs are companions, heavy eaters, shoe destroyers, and occasionally patients of the veterinarian.というのはいけない。これでは、一つのパラグラフの中に多くのトピックを入れてしまうことになり、パラグラフとしては不適當なものになる。
- f. トピックセンテンスは、あまりに明白な事実であってはいけない。事実であれば証明する必要がない。例えば、A dog has four legs. というのは不適當である。

筆者担当のライティングのクラスの学生達は、これらの注意を学ぶ以前には、ただ単なる事実をトピックセンテンスとして書く者が多かった。例えば、日本人の食べる御馳走について書く課題に対しては、*Japanese delicacy is sushi.* に類する文を多くの学生が書いた。この場合、これに続くサポートセンテンスが貧弱なものになる。例えばある学生はこのトピックセンテンスに続けて幾つかの寿司の種類を書いて終わった。

また別の学生は、いつ何処で、どのように調理した寿司を食べたかを一つのパラグラフに書いた。ここから推測されるのは、この学生がプリライティングの段階でのブレーストローミングの練習から、まだ抜け出せずにいたことである。プリライティング段階では、学生はアイデアを無批判に何でも紙に書き出してみることを奨励される。しかしその段階と、きちんとしたトピックセンテンスを持ったパラグラフを書く段階とは、明確に違う段階であることを学生達に意識させなければならない。

Beason & Lester (2003)には、伊藤(2002)とはまた一味違うトピックセンテンスの書き方が示されている。例えば、伊藤(2002)の d.と Beason & Lester (2003)の a.は、明らかに相反する考え方を示している。本稿の目的は、英語でパラグラフを書くにはどのような方法があるのか説明をすることにあるので、これらの2つの説のどちらが正しいのかについては、これ以上触れない。以下は Beason & Lester (2003)に紹介されているトピックセンテンスの書き方である。

- a. 直接的なアプローチをする。パラグラフの目的を明示的に述べる。例えば、*In this paragraph, I want to explain why the school would loose money with a football team.*
- b. 質問形式で書く。例えば、*Why should we debate this issue anyway?* である。
- c. 木の実型をとる。この型は、パラグラフの目的ではなくテーマを述べる。例えば、*The island was full of many strange objects.*
- d. 読者に向かって話しかける形式をとる。*You might be wondering why it is necessary to build a new stadium.*
- e. 前のパラグラフに関連を持つトピックセンテンスを書く。
In contrast, however, the African swallow flies at a much faster rate.
- f. 警告型は、パラグラフに述べられる特別の点に注意を喚起する。
It would be a mistake to assume that students do not care about racism.

4. サポートセンテンスの書き方

サポートセンテンス(support sentence)を書く時は、それらの文がトピックセンテンスをサポートして、テーマに沿った論を展開するように書かなければならない。サポートに使うことの出来る材料は、統計、引用文、自分で観察した事柄などである。

サポートするためとは言っても、何でも一つのパラグラフの中に詰め込んで良い訳ではない。なぜならば、一つのパラグラフは、一つのトピックセンテンスを展開するために存在するからである。ワンパラグラフ、ワントピックの原則を忘れないようにしなければならない。

サポートセンテンス同士をつなぎ合わせる方法としては、時間的(クロノロジカル)、空間的、比較・対照、例示、重要性、抽象・具象などのパターンの方略がある。時間的な観点で文をつなぐ場合は、*before, during, finally*などの語を使ってつなぐ。空間的な場合は、*above, behind, next to*などを使う。比較・対照の場合は、*on the contrary, however, similarly*などを使う。例示する場合は、*for example, in addition, specifically*などを使う。重要性の順につなぎ合わせるには、どの文がトピックセンテンスを説明するのに重要か考えて、重要な文から順に並べる。抽象・具象のパターンを使う場合は、抽象的な分を先に書いてから具体例を書く場合と、その逆のパターンがある。

5. アウトラインと下書き

下書きを始める前に、アウトライニング(outlining)が必要である。そして、アウトライニングをするためには、課題を理解することと、フリーライティングを用いて書くべき事柄を頭に浮かべておかなければならない。アウトライニングには2種類あって、一つはクラスタリング(clustering)、もう一つはリニアアウトライニング(linear outlining)である。

クラスタリングの場合は、アイデアを視覚的にグループ分けする。アイデア同士のつながり毎に、それらのアイデアをグループに分類するのである。

リニアアウトライニングは、名前が示す通り、直線的にアイデアを書き並べて行く方法である。リニアアウトライニングのやり方は、箇条書きの要領でアイデアを上から下に並べることである。アイデアを書き出すという点では、クラスタリングとリニアアウトライニングは全く同じだが、リニアアウトライニングの場合は、アイデアを生み出すやり方であるにもかかわらず、書きながらアイデアの並ぶ順番が決まる。

パラグラフは、普通トピックセンテンスとサポートセンテンスから成るとされているが、文章の最初と最後の文は、それぞれオープニングセンテンスとクロージングセンテンスと呼ばれ、トピックセンテンスとは異なる役割を担う場合がある。特に最初のパラグラフの最初の文は、読者の注意を惹くところであるから、トピックセンテンスではなくてオープニングセンテンスというものが意図的に置かれる場合もある。オープニングセンテンスとして有効な種類の文には、a. 逸話 b. 質問 c. 直接的引用 d. 定義 e. 描写 などがある。またクロージングセンテンスも、読者に印象を与えることを狙って、オープニングセンテンス同様の種類の文が使われる。

6. リヴァイジングとエディティングについて

日本人学生は、作文の手順を意識せずに書いている。大半の学生は、そもそもプライティング活動としてのブレインストーミングと、アウトライニングの違いを区別していないので、パラグラフの中に関係ない要素が入っていても、何ら違和感を感じないまま、書き上がった英作文を教師に提出する。

リヴァイジング(revising)とエディティング(editing)も、日本人学生の間で混同されることが多い。英作文の手順としてリヴァイジングとエディティングは重要である。これらの違いを明確に習得させることにより、学生たちは良い英作文を書けるようになると思われる。

リヴァイジングとは、書いた原稿を推敲することである。他方、エディティングとは、パラグラフの中の文法、大文字・小文字、カンマなどのパンクチュエーションの間違いを探して直すことを意味する。

リヴァイジングは、文章の構成に手を入れて直すことである。そのためには自分の書いた作文を、その課題を出した教師やクラスメートの視点から読み直して見る必要がある。このような必要性から、最近ではクラスルーム内の活動の一環として、クラスメート同士で作文を読み、論旨についてのコメントをするという実践報告も多く見られるようになってきている。論旨にそって読み直すといっても、文法・語法的にあやしい英文を書いているような学生達が、論旨を直せるのだろうかという疑問を持つ教員もいる。しかしいくら文法・語法的に正しい文章が書けていたとしても、それらの文を組み合わせたパラグラフが論理的に書けていないのであれば、本来伝達の手段であるべき文章としては目的に届いていないのではないだろうか。

それでは、どのようにすれば正しいパラグラフを学生に書かせることが出来るのだろうか。そのためには第一に、英語のパラグラフというものが、一つのパラグラフにつき、一つのアイディアを表現するものであるということを、意識させなくてはならない。第二に英語のパラグラフ中のトピックセンテンスを支える、サポートセンテンスの書き方を、理解させなくてはならないと思われる。

日本人学生は、サポートセンテンスをよく誤解する。そもそもサポートセンテンスは、トピックセンテンス

を証明する文であると教えられる。しかし英語のパラグラフの中では、どんなサポートセンテンスを書いても、とにかくトピックセンテンスが証明できれば良いわけではないのである。一つのパラグラフにつき、一つのアイデアを表現するという原則は、サポートセンテンスにも当てはまる。現在、過去、未来のことを全部一つのパラグラフに入れることは出来ないのである。

良いパラグラフを書かせるためには、サポートセンテンスの順序を教えることも必要である。伊藤 (2002) によればサポートセンテンスは、次のような4点に注意して順序を決める必要があるとされる：a. 空間上の位置 b. 時間の流れ c. 概要と詳細 d. 重要性の高低。

トピックセンテンスに続けて文を書くようにと言っても、学生は途方に暮れる。学生が迷わずパラグラフの展開を行うには、これらの点を意識するように指導を行うことが必要ではないだろうか。その上で論理的に書いているかどうかをチェックさせることにより、自主的にリヴィージングが出来るようになるのではないだろうか。

エディティングは、書き上げた文章の文法、綴り、大文字と小文字の誤りを探して直すことである。教室でのエディティングはリヴィージングが終わってから行なわせる。

おわりに

本稿では、ライティングのテストに対応するための方略として、英語で作文をするためのプロセスを辿った。

第一に、与えられた課題の目的を理解することについて述べた。与えられた課題が何を要求しているかをはっきりさせること、すなわち課題があることの説明を要求しているのか、それともあることについて説得することを要求しているのかを明らかにする必要があることに触れた。

第二に、プリライティングの方略を活用することに触れた。フリーライティング、クラスタリング、クエスチョニングなどの方略を活用することが大切である。

第三に、トピックセンテンスの書き方を述べた。トピックセンテンスは、明白な事実であってはいけない。必ず説明をする必要がある文を書かなくてはならない。

第四に、プリライティングで考えた事柄を土台にして具体的なサポートセンテンスの書き方に触れ、サポートセンテンスの並べ方の順番として、時間、空間、重要性などの事項を念頭に置いて順番を決定することの大切さに触れた。

第五に、アイデアをならべてアウトラインを作成してから、下書きに取りかかることに触れた。

最後に、リヴィージングとエディティングについて触れた。リヴィージングは、文章全体の構成を大胆に変更することであるのに対して、エディティングは、文法、綴り、大文字と小文字の見直しをすることである。

日本ではライティングテストは、あまりポピュラーではないのだが、これからはライティングテストに対応するための方略がもっと研究されるべきではないだろうか。かつてTOEFL (Test of English as a Foreign Language) のライティングテストは、オプションであって点数に含まれることはなかったが、現在では評点に含まれるようになってきている。読解力とライティング能力には相関関係があるので、読解力の高い学生はライティングの能力があると看做されていたが故に、ライティングテストは、TOEFLのオプションであり得た。しかし現在のように、米国の大学に在学している間に必要なライティングの能力そのものをテストするようになった背景には、米国の大学でライティング能力への要求が高くなったことと無縁ではないだろう。TOEFLは、不断の見直しと改善が行なわれているが、それは米国の大学で勉強するのに必要とされている英語力の内容と、TOEFLのテストとを近づけようとする試みが続いてきたことを意味する。TOEFLのテスト方法の見直しの過程で、ライティングテストが重要視されるようになったのであるから、日本国内の英語の資格試験にもライティングテストが導入される日が、やがて来るかもしれない。

これまで、英語のテスト対策という視点から英語にアプローチすることにより、教室における英語の実力養成に向けた方略を検討してきた。読解、語彙、聴解、作文と数年間かけて概観して来たが、まだ方略を検討していない項目として文法が残っている。次回以降にまた稿を改めて取り組もうと考えている。

参考文献

Books

Beason, L., & Lester, M. (2003). *A Commonsense Guide to Grammar and Usage*. New York: St.Martin's

Sebranek, P., Kemper, D., & Meyer, V. (2001). *Writers INC: A Student Handbook for Writing and Learning*. Wilmington: Houghton Mifflin

Journal Article

Biber, D. Conrad, S., Reppen, R., Byrd P., & Helt, M. (2002). Speaking and Writing in the University: A Multidimensional Comparison. *TESOL Quarterly* 36, 9-48.

DVD

Thaiss, C., & Shapiro, N.(Academic Team).(2002). *Writing Basics* [DVD].Falls Church: Cerebellum

単行本

大井恭子.(2002).『英語モードでライティング』講談社インターナショナル.

小室俊明編著.(2001).『英語ライティング論』河源社.

ケリー伊藤.(2001).『英語ライティング講座』研究社.

ー.(2002).『英語パラグラフ・ライティング講座』研究社.

付録：ドキュメンテーション (documentation) について

米国の大学では英文で論文を書く場合には、それぞれの学問の領域によって参考文献や注のスタイルを統一している。アカデミックなライティングのための参考文献や注釈には、MLA (the Modern Language Association)とAPA (the American Psychology Association)のスタイルを用いるのが一般的である。日本人が英語の論文を書く場合にも、大抵これらのスタイルに準じている。

ある論文の中に本を引用したとすると、その論文の参考文献の欄は次のようになる。

MLA スタイルの場合

著者の名字, 著者の名前, and (2人以上の場合は、and に続いて著者の名前と名字) . 書名. 都市名: 出版社, 出版年.

APA スタイルの場合

著者の名字, 著者の名前のイニシャル. , & (2人以上の場合は&に続いて著者の名字, 著者の名前のイニシャル) . (出版年). 書名. 都市名: 出版社

具体的には、例えば次のようになる。

MLA スタイルの場合

Okuda, Michael, and Denise Okuda. Star Trek Chronology: The History of the Future. New York:

Pocket, 1993.

APA スタイルの場合

Okuda, J. , & Okuda, D. (1993). Star Trek Chronology: The History of the Future. New York: Pocket

また雑誌論文を引用したとすると、その参考文献の欄は、

MLA スタイルの場合

著者の名字, 著者の名前, and (2人以上の場合は、and に続いて著者の名前と名字の順番) . "論文の題名."
雑誌名 出版年: ページ番号.

APA スタイルの場合

著者の名字, 著者の名前のイニシャル. , & (2人以上の場合は&に続いて著者の名字, 著者の名前のイニシャル) . 論文の題名. 雑誌名, 巻番号, ページ番号.

具体的には、例えば次のようになる。

Wu, Kevin K. S., Ofer Lahav, and Martin J. Rees. "The Large-Scale Smoothness of the Universe."
Nature 397 (1999): 225-30.

APA スタイルの場合

Wu, Kevin K., Lahav, O, & Rees, M.J. (1991). What about Africa? The Progressive, 55, 39.

ここでは分かりやすくするために書名に下線を引いた。手書き原稿の場合は、書名に下線を引くが、論文やレポートをコンピュータで出力する場合は、下線の代わりにイタリックを用いるのが普通である。